おじいさんのランプ

新美南吉

かくれんぼで、倉のすみにもぐりこんだ東一君がランプを持って出てきた。八十センチぐらいの太い竹の筒が台になっていて、その上にちょっぴり火のともる部分がくっついている、そしてほやは、細いガラスの筒であった。はじめてみるものにはランプとは思えないほどだった。

そこでみんなは、むかしの鉄砲とまちがえてしまった。

「なんだア、鉄砲かア。」と鬼の宗八君はいった。

東一君のおじいさんも、しばらくそれがなんだかわからなかった。眼鏡ごしにじっとみていてから、はじめてわかったのである。

ランプであることがわかると、東一君のおじいさんはこういって子どもたちをしかりはじめた。

「こらこら、お前たちは何を持ち出すか。まことに子どもというものは、だまって遊ばせておけば何を持ち出すやらわけのわからん、油断もすきもない、ぬすっと猫のようなものだ。こらこら、それはここへ持ってきて、お前たちは外へいって遊んでこい。外にいけば、電信柱でもなんでも遊ぶものはいくらでもあるに。」

こうしてしかられると子どもははじめて、自分がよくない行ないをしたことがわかるのである。そこで、ランプを持ち出した東一君はもちろんのこと、何も持ち出さなかった近所の子どもたちも、自分た

ちみんなでわるいことをしたような顔をして、すごすごと外の道へ出ていった。

外には、春の昼の風が、ときおり道のほこりをふき立ててすぎ、のろのろと牛車が通ったあとを、白い蝶がいそがしそうに通ってゆくこともあった。なるほど電信柱があっちこっちに立っている。しかし子どもたちは電信柱なんかで遊びはしなかった。おとなが、こうして遊べといったことを、いわれたままに遊ぶというのはなんとなくばかげているように子どもには思えるのである。

そこで子どもたちは、ポケットの中のラムネ玉をカチカチいわせながら、広場の方へとんでいった。そしてまもなく自分たちの遊びで、さっきのランプのことはわすれてしまった。

日ぐれに東一君は家へ帰ってきた。奥の居間のすみに、あのランプがおいてあった。しかし、ランプのことを何かいうと、またおじいさんにがみがみいわれるかも知れないので、だまっていた。

夕ご飯のあとの退屈な時間がきた。東一君はたんすにもたれて、ひき出しのかんをカタンカタンといわせていたり、店に出てひげをはやした農学校の先生が『大根栽培の理論と実際』というような、むつかしい名前の本を番頭に注文するところを、じっとみていたりした。

そういうことにもあくと、また奥の居間にもどってきて、おじいさんがいないのをみすまして、ランプのそばへにじりより、そのほやをはずしてみたり、五銭白銅貨ほどのねじをまわして、ランプのしんを出したりひっこめたりしていた。

すこしいっしょうけんめいになっていじくっていると、またおじいさんにみつかってしまった。けれどこんどはおじいさんはしからなかった。ねえやにお茶をいいつけておいて、すっぽんと煙管筒をぬきながら、こういった。

「東坊、このランプはな、おじいさんにはとてもなつかしいものだ。長いあいだわすれておったが、きょう東坊が倉のすみから持ち出してきたので、またむかしのことを思い出したよ。こうおじいさんみたいに年をとると、ランプでもなんでもむかしのものに出合うのがとてもうれしいもんだ。」

東一君はぽかんとしておじいさんの顔をみていた。おじいさんはがみがみとしかりつけたから、おこっていたのかと思ったら、むかしのランプにあうことができて喜んでいたのである。

「ひとつむかしの話をしてやるから、ここへきてすわれ。」

とおじいさんがいった。

東一君は話がすきだから、いわれるままにおじいさんの前へいってすわったが、なんだかお説教をされるときのようで、いごこちがよくないので、いつもうちで話をきくときにとる姿勢をとって聞くことにした。つまり、寝そべって両足をうしろへ立てて、ときどき足のうらをうちあわせる芸当をしたのである。

おじいさんの話というのはつぎのようであった。

いまから五十年ぐらいまえ、ちょうど日露戦争のじぶんのことである。岩滑新田の村に巳之助という十三の少年がいた。

巳之助は、父母も兄弟もなく、親戚のものとてひとりもない、まったくのみなしごであった。そこで巳之助は、よその家の走り使いをしたり、女の子のように子守をしたり、米をついてあげたり、そのほか、巳之助のような少年にできることならなんでもして、村においてもらっていた。

けれども巳之助は、こうして村の人びとのお世話で生きてゆくことは、ほんとうをいえばいやであった。子守をしたり、米をついたりして一生を送ると

するなら、男とうまれたかいがないと、つねづね思っていた。

男子は身を立てねばならない。しかしどうして身を立てるか。巳之助は毎日、ご飯をたべてゆくのがやっとのことであった。本一冊買うお金もなかったし、またたといお金があって本を買ったとしても、読むひまがなかった。

身を立てるのによいきっかけがないものかと、巳之助はこころひそかに待っていた。

するとある夏の日のひるさがり、巳之助は人力車の先綱をたのまれた。

そのころ岩滑新田には、いつも二三人の人力ひきがいた。潮湯治（海水浴のこと）に名古屋からくる客は、たいてい汽車で半田まできて、半田から知多半島西海岸の大野や新舞子まで人力車でゆられていったもので、岩滑新田はちょうどその道すじにあたっていたからである。

人力車は人がひくのだからあまりはやくは走らない。それに、岩滑新田と大野のあいだには峠が一つあるから、よけい時間がかかる。おまけにそのころの人力車の輪は、ガラガラと鳴る重い鉄輪だったのである。そこで、急ぎの客は、賃銀を倍出して、ふたりの人力ひきにひいてもらうのであった。巳之助に先綱ひきをたのんだのも、急ぎの避暑客であった。

巳之助は人力車のながえにつながれた綱を肩にかついで、夏の入陽のじりじり照りつける道を、えいやえいやと走った。なれないこととてたいそう苦しかった。しかし巳之助は苦しさなど気にしなかった。好奇心でいっぱいだった。なぜなら巳之助は、ものごころがついてから、村を一歩も出たことがなく、峠の向こうにどんな町があり、どんな人びとが住んでいるか知らなかったからである。

日がくれて青い夕闇の中を人びとがほの白くあ

ちこちするころ、人力車は大野の町にはいった。

巳之助はその町でいろいろな物をはじめてみた。軒をならべてつづいている大きい商店が、第一、巳之助にはめずらしかった。巳之助の村にはあきないやとては一軒しかなかった。駄菓子、わらじ、糸くりの道具、膏薬、貝殻にはいった目薬、そのほか村で使うたいていの物を売っている小さな店が一軒きりしかなかったのである。

しかし巳之助をいちばんおどろかしたのは、その大きな商店が、一つ一つともしている、花のように明るいガラスのランプであった。巳之助の村では夜はあかりなしの家が多かった。まっくらな家の中を、人びとは盲のように手でさぐりながら、水がめや、石臼や大黒柱をさぐりあてるのであった。すこしぜいたくな家では、おかみさんが嫁入りのとき持ってきたあんどんを使うのであった。あんどんは紙を四方にはりめぐらした中に、油のはいった皿があって、その皿のふちにのぞいている燈心に、桜のつぼみぐらいの小さいほのおがともると、まわりの紙にみかん色のあたたかな光がさし、付近はすこし明るくなったのである。しかしどんなあんどんにしろ、巳之助が大野の町でみたランプの明るさにはとてもおよばなかった。

それにランプは、そのころとしてはまだめずらしいガラスでできていた。すすけたり、やぶれたりしやすい紙でできているあんどんより、これだけでも巳之助にはいいもののように思われた。

このランプのために、大野の町ぜんたいが竜宮城かなにかのように明るく感じられた。もう巳之助は自分の村へ帰りたくないとさえ思った。人間はだれでも明るいところから暗いところに帰るのをこのまないのである。

巳之助は駄賃の十五銭をもらうと、人力車ともわかれてしまって、お酒にでもよったように、波の音

のたえまないこの海辺の町を、めずらしい商店をのぞき、美しく明るいランプにみとれて、さまよっていた。

呉服屋では、番頭さんが、椿の花を大きくそめ出した反物を、ランプの光の下にひろげて客にみせていた。

穀屋では、小僧さんがランプの下であずきのわるいのを一粒ずつひろい出していた。またある家では女の子が、ランプの光の下に白くひかる貝殻をちらしておはじきをしていた。またある店ではこまかいたまに糸を通して数珠をつくっていた。ランプの青やかな光のもとでは、人びとのこうした生活も、物語か幻燈の世界でのように美しくなつかしくみえた。

巳之助はいままでなんども、「文明開化で世の中がひらけた。」ということをきいていたが、いまはじめて文明開化ということがわかったような気がした。

歩いているうちに、巳之助は、さまざまなランプをたくさんつるしてある店のまえにきた。これはランプを売っている店にちがいない。

巳之助はしばらくその店のまえで十五銭をにぎりしめながらためらっていたが、やがて決心してつかつかとはいっていった。

「ああいうものを売っとくれや。」

と巳之助はランプをゆびさしていった。まだランプということばを知らなかったのである。

店の人は、巳之助がゆびさした大きいつりランプをはずしてきたが、それは十五銭では買えなかった。

「まけとくれや。」

と巳之助はいった。

「そうはまからん。」

と店の人は答えた。

「卸値で売っとくれや。」

巳之助は村の雑貨屋へ、作ったわらじを買っても

らいによくいったので、物には卸値と小売値があって、卸値は安いということを知っていた。たとえば、村の雑貨屋は、巳之助の作った瓢箪型のわらじを卸値の一銭五厘で買いとって、人力ひきたちに小売値の二銭五厘で売っていたのである。

ランプ屋の主人は、みも知らぬどこかの小僧がそんなことをいったので、びっくりしてまじまじと巳之助の顔をみた。そしていった。

「卸値で売れって、そりゃ相手がランプを売る家なら卸値で売ってあげてもいいが、ひとりひとりのお客に卸値で売るわけにはいかんな。」

「ランプ屋なら卸値で売ってくれるだのイ？」

「ああ。」

「そんなら、おれ、ランプ屋だ。卸値で売ってくれ。」

店の人はランプを持ったまま笑い出した。

「おめえがランプ屋？　はッはッはッはッ」

「ほんとうだよ、おッつあん。おれ、ほんとうにこれからランプ屋になるんだ。な、だからたのむに、今日は一つだけンど卸値で売ってくれや。こんどくるときゃ、たくさん、いっぺんに買うで。」

店の人ははじめ笑っていたが、巳之助の真剣なようすに動かされて、いろいろ巳之助の身の上をきいたうえ、

「よし、そんなら卸値でこいつを売ってやろう。ほんとは卸値でもこのランプは十五銭じゃ売れないけど、おめえの熱心なのに感心した。まけてやろう。そのかわりしっかりしょうばいをやれよ。うちのランプをどんどん持ってって売ってくれ。」

といって、ランプを巳之助にわたした。

巳之助はランプのあつかい方を一通り教えてもらい、ついでにちょうちんがわりにそのランプをともして、村へむかった。

藪や松林のうちつづく暗い峠道でも、巳之助はもうこわくはなかった。花のように明るいランプをさ

げていたからである。
巳之助の胸の中にも、もう一つのランプがともっていた。文明開化におくれた自分の暗い村に、このすばらしい文明の利器を売りこんで、村人たちの生活を明るくしてやろうという希望のランプが――

巳之助の新しいしょうばいは、はじめのうちまるではやらなかった。百姓たちはなんでも新しいものを信用しないからである。
そこで巳之助はいろいろ考えたあげく、村で一軒きりのあきないやへそのランプを持っていって、ただでかしてあげるからしばらくこれを使ってくださいとたのんだ。
雑貨屋のばあさんは、しぶしぶ承知して、店の天井に釘を打ってランプをつるし、その晩からともした。
五日ほどたって、巳之助がわらじを買ってもらいにいくと、雑貨屋のばあさんはにこにこしながら、こりゃたいへん便利で明るうて、夜でもお客がようきてくれるし、釣銭をまちがえることもないので、気に入ったから買いましょう、といった。その上、ランプのよいことがはじめてわかった村人から、もう三つも注文のあったことを巳之助にきかしてくれた。巳之助はとびたつように喜んだ。
そこで雑貨屋のばあさんからランプの代とわらじの代をうけとると、すぐその足で、走るようにして大野へいった。そしてランプ屋の主人にわけを話して、たりないところはかしてもらい、三つのランプを買ってきて、注文した人に売った。
これから巳之助のしょうばいははやってきた。
はじめは注文をうけただけ大野へ買いにいっていたが、すこし金がたまると、注文はなくてもたくさん買いこんできた。
そしていまはもう、よその家の走り使いや子守を

することはやめて、ただランプを売るしょうばいだけにうちこんだ。ものほし台のようなわく、のついた車をしたてて、それにランプやほやなどをいっぱいつるし、ガラスのふれあう涼しい音をさせながら、巳之助は自分の村や付近の村々へ売りにいった。

巳之助はお金ももうかったが、それとは別に、このしょうばいがたのしかった。いままで暗かった家に、だんだん巳之助の売ったランプがともってゆくのである。暗い家に、巳之助は文明開化の明るい火を一つ一つともしてゆくような気がした。

巳之助はもう青年になっていた。それまでは自分の家とてはなく、区長さんのところの軒のかたむいた納屋に住ませてもらっていたのだが、小金がたまったので、自分の家もつくった。すると世話してくれる人があったのでお嫁さんももらった。

あるとき、よその村でランプの宣伝をしておって、「ランプの下なら畳の上に新聞をおいて読むことができるのイ。」と区長さんに以前きいていたことをいうと、お客さんのひとりが「ほんとかン？」とききかえしたので、嘘のきらいな巳之助は、自分でためしてみる気になり、区長さんのところから古新聞をもらってきて、ランプの下にひろげた。

やはり区長さんのいわれたことはほんとうであった。新聞のこまかい字がランプの光で一つ一つはっきりみえた。「わしは嘘をいってしょうばいをしたことにはならない。」と巳之助はひとりごとをいった。しかし巳之助は、字がランプの光ではっきりみえてもなんにもならなかった。字を読むことができなかったからである。

「ランプで物はよくみえるようになったが、字が読めないじゃ、まだほんとうの文明開化じゃねえ。」

そういって巳之助は、それから毎晩区長さんのところへ字を教えてもらいにいった。

熱心だったので一年もすると、巳之助は尋常科を

卒業した村人のだれにもまけないくらい読めるようになった。

そして巳之助は書物を読むことをおぼえた。

巳之助はもう、男ざかりのおとなであった。家には子どもがふたりあった。「自分もこれでどうやらひとり立ちができたわけだ。まだ身を立てるというところまではいっていないけれども。」と、ときどき思ってみて、そのつど心に満足を覚えるのであった。

さてある日、巳之助がランプのしんをしいれに大野の町へやってくると、五六人の人夫が道のはたに穴をほり、太い長い柱を立てているのをみた。その柱の上の方には腕のような木が二本ついていて、その腕木には白い瀬戸物のだるまさんのようなものがいくつかのっていた。こんな奇妙なものを道のわきに立てて何にするのだろう、と思いながらすこし先にゆくと、また道ばたに同じような高い柱が立っていて、それには雀が腕木にとまって鳴いていた。

この奇妙な高い柱は五十メートルぐらいあいだをおいては、道のわきに立っていた。

巳之助はついに、ひなたでうどんをほしている人にきいてみた。すると、うどんやは「電気とやらいうもんが今度ひけるだげな。そいでもう、ランプはいらんようになるだげな。」と答えた。

巳之助にはよくのみこめなかった。電気のことなどまるで知らなかったからだ。ランプのかわりになるものらしいのだが、そうとすれば、電気というものはあかりにちがいあるまい。あかりなら、家の中にともせばいいわけで、何もあんなとてつもない柱を道のくろに何本もおっ立てることはないじゃないかと、巳之助は思ったのである。

それから一月ほどたって、巳之助がまた大野へいくと、このあいだ立てられた道のはたの太い柱には、

黒い綱のようなものが数本わたされてあった。黒い綱は、柱の腕木にのっているだるまさんの頭を一まきしてつぎの柱へわたされ、そこでまただるまさんの頭を一まきしてつぎの柱にわたされ、こうしてどこまでもつづいていた。

注意してよくみると、ところどころの柱から黒い綱が二本ずつだるまさんの頭のところでわかれて、家の軒端につながれているのであった。

「へへえ、電気とやらいうもんはあかりがともるもんかと思ったら、これはまるで綱じゃねえか。雀や燕のええ休み場というもんよ。」

と巳之助がひとりであざわらいながら、知り合いの甘酒屋にはいってゆくと、いつも土間のまん中の飯台の上につるしてあった大きなランプが、横の壁のあたりにとりかたづけられて、あとにはそのランプをずっと小さくしたような、石油入れのついていない、変なかっこうのランプが、丈夫そうな綱で天井からぶらさげられてあった。

「なんだやい、変なものをつるしたじゃねえか。あのランプはどこかわるくでもなったかやい。」

と巳之助はきいた。すると甘酒屋が、

「ありゃ、こんどひけた電気というもんだ。火事の心配がのうて、明るうて、マッチはいらぬし、なかなか便利なもんだ。」

と答えた。

「へッ、へんてこれんなものをぶらさげたもんよ。これじゃ甘酒屋の店もなんだかまがぬけてしまった。客もへるだろうよ。」

甘酒屋は、相手がランプ売りであることに気がついたので、電燈の便利なことはもういわなかった。

「なア、甘酒屋のとッつあん。みなよ、あの天井のとこを。ながねんのランプのすすであそこだけ真黒になっとるに。ランプはもうあそこにいついてしまったんだ。いまになって電気たらいう便利なもんが

できたからとて、あそこからはずされて、あんな壁のすみっこにひっかけられるのは、ランプがかわいそうよ。」

こんなふうに巳之助はランプの肩をもって、電燈のよいことはみとめなかった。

ところでまもなく晩になって、だれもマッチ一本すらなかったのに、とつぜん甘酒屋の店が真昼のように明るくなったので、巳之助はびっくりした。あまり明るいので、巳之助は思わずうしろをふりむいてみたほどだった。

「巳之さん、これが電気だよ。」

巳之助は歯をくいしばって、ながいあいだ電燈をみつめていた。かたきでもにらんでいるようなかおつきであった。あまりみつめていて眼のたまがいたくなったほどだった。

「巳之さん、そういっちゃなんだが、とてもランプでたちうちはできないよ。ちょっと外へくびを出して町通りをみてごらんよ。」

巳之助はむっつりと入口の障子をあけて、通りをながめた。どこの家どこの店にも、甘酒屋のと同じように明るい電燈がともっていた。光は家の中にあまって、道の上にまでこぼれ出ていた。ランプをみなれていた巳之助にはまぶしすぎるほどのあかりだった。巳之助は、くやしさに肩でいきをしながら、これも長いあいだながめていた。

ランプの、てごわいかたきが出てきたわい、と思った。いぜんには文明開化ということをよくいっていた巳之助だったけれど、電燈がランプよりいちだん進んだ文明開化の利器であるということはわからなかった。りこうな人でも、自分が職を失うかどうかというようなときには、物事の判断が正しくつかなくなることがあるものだ。

その日から巳之助は、電燈が自分の村にもひかれるようになることを、心ひそかにおそれていた。電

燈がともるようになれば、村人たちはみんなランプを、あの甘酒屋のしたように壁のすみにつるすか、倉の二階にでもしまいこんでしまうだろう。ランプ屋のしょうばいはいらなくなるだろう。

だが、ランプでさえ村へはいってくるにはかなりめんどうだったから、電燈となっては村人たちはこわがって、なかなかよせつけることではあるまい、と巳之助は、一方では安心もしていた。

しかしまもなく、「こんどの村会で、村に電燈をひくかどうかをきめるだげな。」というわさをきいたときには、巳之助は脳天に一撃をくらったような気がした。強敵いよいよござんなれ、と思った。

そこで巳之助はだまってはいられなかった。村の人びとのあいだに、電燈反対の意見をまくしたてた。「電気というものは、長い線で山の奥からひっぱってくるもんだでのイ、その線をば夜中に狐や狸がつたってきて、この近ぺんの田畠をあらすことはうけあいだね。」

こういうばかばかしいことを巳之助は、自分のなれたしょうばいを守るためにいうのであった。それをいうとき何かうしろめたい気がしたけれども。

村会がすんで、いよいよ岩滑新田の村にも電燈をひくことにきまったと聞かされたときにも、巳之助は脳天に一撃をくらったような気がした。こうたびたび一撃をくらってはたまらない、頭がどうかなってしまう、と思った。

その通りであった。頭がどうかなってしまった。村会のあとで三日間、巳之助は昼間もふとんをひっかぶってねていた。そのあいだに頭の調子がくるってしまったのだ。

巳之助はだれかをうらみたくてたまらなかった。そこで村会で議長の役をした区長さんをうらむことにした。そして区長さんをうらまねばならぬわけをいろいろ考えた。へいぜいは頭のよい人でも、し

ょうばいを失うかどうかというようなせとぎわでは、正しい判断をうしなうものである。とんでもないうらみをいだくようになるものである。

菜の花ばたの、あたたかい月夜であった。どこかの村で春祭りのしたくに打つ太鼓がとほとほと聞こえてきた。

巳之助は道を通ってゆかなかった。みぞの中をいたちのように身をかがめて走ったり、藪の中をすて犬のようにかきわけたりしていった。他人にみられたくないとき、人はこうするものだ。

区長さんの家には長いあいだやっかいになっていたので、よくその様子はわかっていた。火をつけるにいちばん都合のよいのは藁屋根の牛小屋であることは、もう家を出るときから考えていた。

母屋はもうひっそりねしずまっていた。牛小屋もしずかだった。しずかだといって、牛はねむっているかめざめているかわかったもんじゃない。牛は起きていてもねていてもしずかなものだから。もっとも牛が眼をさましていたって、火をつけるにはいっこうさしつかえないわけだけれども。

巳之助はマッチのかわりに、マッチがまだなかったじぶん使われていた火打の道具を持ってきた。家を出るとき、かまどのあたりでマッチをさがしたが、どうしたわけかなかなかみつからないので、手にあたったのをさいわい、火打の道具を持ってきたのだった。

巳之助は火打で火を切りはじめた。火花は飛んだが、ほくちがしめっているのか、ちっともえあがらないのであった。巳之助は火打というものは、あまり便利なものではないと思った。火が出ないくせにカチカチと大きな音ばかりして、これではねている人が眼をさましてしまうのである。

「ちぇッ」と巳之助は舌打ちしていった。「マッチ

を持ってくりゃよかった。こげな火打みてえな古くせえもなァ、いざというときにまにあわねえだなァ。」

そういってしまって巳之助は、ふと自分のことばをききとがめた。

「古、く、せ、え、も、な、ア、、い、ざ、と、い、う、と、き、ま、に、あ、わ、ね、え、、……古、く、せ、え、も、な、ア、ま、に、あ、わ、ね、え、……」

ちょうど月が出て空が明るくなるように、巳之助の頭がこのことばをきっかけにして明るく晴れてきた。

巳之助は、いまになって、自分のまちがっていたことがはっきりわかった。――ランプはもはや古い道具になったのである。電燈という新しいいっそう便利な道具の世の中になったのである。それだけ世の中がひらけたのである。文明開化が進んだのである。巳之助もまた日本のお国の人間なら、日本がこれだけ進んだことを喜んでいいはずなのだ。古い自分のしょうばいが失われるからとて、世の中の進むのにじゃましようとしたり、なんのうらみもない人をうらんで火をつけようとしたのは、男としてなんという見苦しいざまであったことか。世の中が進んで、古いしょうばいがいらなくなれば、男らしく、すっぱりそのしょうばいはすてて、世の中のためになる新しいしょうばいにかわろうじゃないか。――

巳之助はすぐ家へとってかえした。

そしてそれからどうしたか。

ねているおかみさんを起こして、いま家にあるすべてのランプに石油をつがせた。

おかみさんは、こんな夜ふけに何をするつもりか巳之助にきいたが、巳之助は自分がこれからしようとしていることをきかせれば、おかみさんがとめるにきまっているので、だまっていた。

ランプは大小さまざまのがみなで五十ぐらいあった。それにみな石油をついだ。そしていつもあき

ないに出るときと同じように、車にそれらのランプをつるして、外に出た。こんどはマッチをわすれずに持って。

道が西の峠にさしかかるあたりに、半田池という大きな池がある。春のことでいっぱいたたえた水が、月の下で銀盤のようにけぶり光っていた。池の岸にははんの木や柳が、水の中をのぞくようなかっこうで立っていた。

巳之助は人気のないここをえらんできた。

さて巳之助はどうするというのだろう。

巳之助はランプに火をともした。一つともしては、それを池のふちの木の枝につるした。小さいのも大きいのも、とりまぜて、木にいっぱいつるした。一本の木でつるしきれないと、そのとなりの木につるした。こうしてとうとうみんなのランプを三本の木につるした。

風のない夜で、ランプは一つ一つがしずかにまじろがず、もえ、あたりは昼のように明るくなった。あかりをしたってよってきた魚が、水の中にきらりきらりとナイフのように光った。

「わしの、しょうばいのやめ方はこれだ。」

と巳之助はひとりでいった。しかし立ちさりかねて、ながいあいだ両手をたれたままランプの鈴なりになった木をみつめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。ながの年月なじんできたランプ。

「わしのしょうばいのやめ方はこれだ。」

それから巳之助は池のこちら側の往還にきた。まだランプは、向こう側の岸の上にみなともっていた。五十いくつがみなともっていた。そして水の上にも五十いくつの、さかさまのランプがともっていた。立ちどまって巳之助は、そこでもながくみつめていた。

ランプ、ランプ、なつかしいランプ。

やがて巳之助はかがんで、足もとから石ころを一つひろった。そして、いちばん大きくともっているランプにねらいをさだめて、力いっぱい投げた。パリーンと音がして、大きい火がひとつ消えた。

「お前たちの時世はすぎた。世の中は進んだ。」

と巳之助はいった。そしてまた一つ石ころをひろった。二番目に大きかったランプが、パリーンと鳴って消えた。

「世の中は進んだ。電気の時世になった。」

三番目のランプをわったとき、巳之助はなぜか涙(なみだ)がうかんできて、もうランプにねらいをさだめることができなかった。

こうして巳之助はいままでのしょうばいをやめた。それから町に出て、新しいしょうばいをはじめた。本屋になったのである。

× × ×

「巳之助さんはいまでもまだ本屋をしている。もっともいまじゃだいぶ年とったので、息子(むすこ)が店はやっているがね。」

と東一君のおじいさんは話をむすんで、さめたお茶をすすった。巳之助さんというのは東一君のおじいさんのことなので、東一君はまじまじとおじいさんの顔をみた。いつのまにか東一君はおじいさんのまえにすわりなおして、おじいさんのひざに手をおいたりしていたのである。

「そいじゃ、のこりの四十七のランプはどうした？」

と東一君はきいた。

「知らん。つぎの日、旅の人がみつけて持ってったかも知れない。」

「そいじゃ、家にはもう一つもランプなしになっちゃった？」

「うん、ひとつもなし。この台ランプだけがのこっていた。」

とおじいさんは、ひるま東一君が持ち出したランプ

をみていった。
「損(そん)しちゃったね。四十七もだれかに持ってかれちゃって。」
と東一君がいった。
「うん損しちゃった。いまから考えると、何もあんなことをせんでもよかったとわしも思う。岩滑新田に電燈がひけてからでも、まだ五十ぐらいのランプはけっこう売れたんだからな。岩滑新田の南にある深谷(ふかだに)なんという小さい村じゃ、まだいまでもランプを使っているし、ほかにも、ずいぶんおそくまでランプを使っていた村は、あったのさ。しかし何しろわしもあのころは元気がよかったんでな。思いついたら、深くも考えず、ぱっぱっとやってしまったんだ。」
「ばかしちゃったね。」
と東一君は孫だからえんりょなしにいった。
「うん、ばかしちゃった。しかしね、東坊――」
とおじいさんは、きせるを膝(ひざ)の上でぎゅッとにぎりしめていった。
「わしのやり方はすこしばかだったが、わしのしょうばいのやめ方は、自分でいうのもなんだが、なかなかりっぱだったと思うよ。わしのいいたいのはこうさ、日本がすすんで、自分の古いしょうばいがお役に立たなくなったら、すっぱりそいつをすてるのだ。いつまでもきたなく古いしょうばいにかじりついていたり、自分のしょうばいがはやっていたむかしの方がよかったといったり、世の中のすすんだことをうらんだり、そんな意気地のねえことはけっしてしないということだ。」
東一君はだまって、ながいあいだおじいさんの、小さいけれど意気のあらわれた顔をながめていた。
やがて、いった。
「おじいさんはえらかったんだねえ。」
そしてなつかしむように、かたわらの古いランプ

をみた。

「おじいさんのランプ」

新装版『新美南吉童話集 2 おじいさんのランプ』（2012年・大日本図書株式会社）所収の「おじいさんのランプ」をもとに一部、漢字表記とルビを編集しました。

※このテキストを個人的に読む以外の利用をされる場合には、新美南吉記念館までご連絡ください。
（TEL:0569-26-4888）